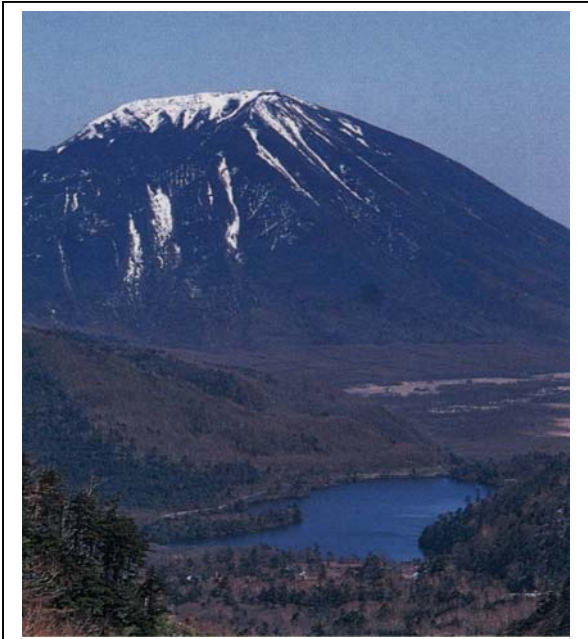


## < 日光「湯の湖」の浄化に貢献 >

湯の湖は、栃木県北西部の標高1,478mに位置し、下流の中禅寺湖とともに日光国立公園を代表する湖です。春夏秋冬それぞれの季節に、マス釣り、ボート遊び、紅葉の中での散策、スキーなど、美しい自然を楽しむたくさんの方が、年間を通して訪れます。また、湖畔には古くから名湯で知られる湯元温泉があり、地元はもとより全国からの観光客で賑わいを見せています。

ところが、この清らかであった湯の湖の湖水も、観光化とともに生活系排水の流入で徐々に汚濁が進行し、全国的な傾向である富栄養化現象がもたらされるようになりました。

このような状況から日光市では、1979（昭和54）年に湯元下水終末処理場に、高度処理施設を増設することにより、汚濁の進行防止に一応の成果をあげてきました。しかし、すでに堆積していたヘドロ（汚泥）からの栄養分（栄養塩）が溶け出すことが、どうしても浄化の妨げとなり、栃木県はヘドロの除去に関する各種の調査と試験を実施するとともに、新たな処置方法の確立に取り組むことになり、1989（平成元）年度から、建設省（当時）の国庫補助事業として、湖底のヘドロを除去するという、全国でもはじめての湖沼浄化事業が実施されることになりました。



湯の湖（栃木県日光市）全景



事業の概要図

その内容は、まず湯の湖に堆積したヘドロをポンプ式の「浚渫（しゅんせつ）船」で吸い上げ、湖畔に設けた浄化施設に送ります。浄化施設ではヘドロの泥分（汚泥）と上澄み水とを分離し、きれいになった水を湖に戻します。残った汚泥は、さらに機械で圧搾して脱水した後、薬剤を使って固めて（固化処理）から、隣接するスキー場ゲレンデの整備用の土として再利用しました。

この、湯の湖浄化事業は、19万2,000m<sup>3</sup>ものヘドロを汲み上げ、1996（平成8）年に完了しました。湯の湖ならびに湖下流の湯川の水が日増しにきれいになっており、さらに、そのまた下流の中禅寺湖の水質改善が図られています。このように、本事業は、観光地日光のイメージアップならびに地域市民の生活に欠かすことのできない水源地の環境整備に大いに貢献するものとなりました。